グジェゴシュ・ヤジィナ演出『ソラリス4』（リトアニア国立ドラマ劇場）© Dmitrij Matvejev

［リトアニア］

ディストピアの時代

クリスティナ・ステイブリーテ

リトアニアは、バルト海の東海岸に位置する小さな国である。他の東ヨーロッパ諸国と同様、我が国は長きにわたって西と東の境目に佇んできた。ここは、異なる風習、あらゆる民族の価値観や文化が混ざり合う場所。この地理的位置がゆえに、多様な文化の影響を受け、特殊な歴史や外観が育まれていった。また、この歴史的背景は、現代演劇や伝統演劇を含むリトアニア演劇の基盤になっている。

例えば、ポーランドと隣接しているリトアニアは、ルネサンス時代とバロック様式が流行した時代に、イタリアのアートの影響を受けている。ポーランドとの密接な関係は、演劇にも及んだ。リトアニアは、近年、ポーランドのコンテンポラリー・シアターの作り手に注目し、リトアニアの国立劇場に演出家として招へいするなどしている。その人気は高まるばかりだ。ポーランドの現代演劇はリトアニアの演劇に大きく影響している。

さらに、リトアニア演劇は、ロシア演劇の影響も受けている。これも地理的な近さが関係している。リトアニアは過去に2度、ロシアの支配下に置かれている。1度目は、ロシア帝国時代。2度目は共産主義のソビエト連邦の時代だった。

はじめに侵略されたのは、18世紀末のこと。19世紀の蜂起が失敗したのをきっかけに、公の場でのリトアニア語の使用が禁じられた。もちろん、劇場でも禁止された。しかし、全員が大人しくこの命令に従ったわけではない。この侵略はむしろ、リトアニアのナショナル・アイデンティティーを強化し、現代のリトアニア語の発達に貢献したうえ、リトアニア国立劇場の土台作りにつながった。この占領によって、多くのリトアニア人は、ロシアの主要都市の大学へ進学した。このとき演劇を学んだリトアニア人たちは、在学中に習得したスキルを自国に持ち帰ってアマチュア劇団を作った。これらはのちにプロの劇団に成長してゆく。

20世紀半ばのソ連による占領は、リトアニアの演劇に多大なる影響を与え、その痕跡は今でも残っている。まず、ソ連全域で社会主義リアリズムを強いられ、その意味で、演劇ではスタニスラフスキー・システムの実施が絶対とされた。また、国立劇場のレパートリー・システムが設けられた。ここ30年間で、民間の劇団や劇場によって少しずつ緩まってはいるが、今でもこのシステムは生きている。さらに、ソ連占領時代の副産物として、視覚的メタファーがある。これはソ連が課したルールではなく、ソ連全域に蔓延(はびこ)っていた検閲によって自然に生まれたものである。ソ連の支配下にあった頃は、まだテキストを主とする演劇が大半を占めていたが、エイムンタス・ネクローシュス(Eimuntas Nekrošius)をはじめ、演出家の中には、台詞に視覚的なフィルターを加える者がいた。このフィルターは、役者が発する言葉を、強化し、別の言葉にすり替え、または、その言葉とは真逆の印象を与えるなどの効果がある。20世紀末に再び国として独立した頃には、占領時代のロシア演劇の影響を強く受けつつも、独自のメタフォリックな演劇言語が確立していた。

2010年代末、ソ連支配下で禁じられていた表現すべてを試した後、リトアニア演劇は、独自の顔を形成しつつあった。ベテラン男性演出家の影響力が目立ち、最も人気があったのは古典劇。作品の新解釈は、演出家の腕の見せ所だった。また、興味深いビジュアル・アーティストが次々に出現した。リトアニア演劇のアイデンティティーの在り処を問う傾向は30年前から続いているが、最近は、少しずつ演劇界に新たな風が吹きつつある。その理由の一つに、古株の演出家の人気が少しずつ落ち始めているというのがある。演出する機会も減り、評価も下がっていった。パンデミックがはじまった頃、リトアニア演劇はちょうど大きな節目を迎えていた。コロナによって足止めをくらった演劇界だが、それがかえって変化を加速させたようである。

昨シーズンのリトアニア演劇には、過去10年間に比べて、明らかな変化がいくつか見受けられた。まず、若手のクリエーターによる小規模な作品が目立った。また、デバイジング方式の作品やドキュメンタリー劇が出現し、人気小説を土台にした舞台作品が、古典劇よりも人気が上回った。作品が小規模になり、観客との距離が縮まることで、視覚的な効果よりも、俳優個々の演技力が問われるようになった。さらに、女性の視点から描かれた作品も増えつつある。これらの変化は、ほとんどが若い世代が産みだしたものであるため、しばらく消えることはないだろう。特筆すべきはSF、それもディストピアをテーマにした演劇作品の出現である。一過性のものに過ぎないかもしれないが、明らかに、昨シーズン最も目立ったジャンルである。

2021/2022シーズンは、有名なSF小説の舞台作品から始まった。9月のはじめ、リトアニア国立青年劇場（Jaunimo Teatras / Lithuanian State Youth Theatre）の大ホールの前に多くの観客が集まった。オルダス・ハクスリー原作『すばらしい新世界（Puikus naujas pasaulis / Brave New World）』（演出：ギンタラス・ヴァルナス［Gintaras Varnas］）の初日を見るためである。ヴァルナスらしい、味わい深く視覚的な作品だった。アートとしての現代リトアニア演劇を体現したこの作品は、日々の営みやアートの在り方について問いかけた。この作品には、ヴァルナス自身が育てた新人俳優も出演している。その中でも最も注目されたのが、ジョン役を演じたマータス・シグリュウカス（Matas Sigliukas）である。

この公演から1週間後、ポーランドの演出家グジェゴシュ・ヤジィナ（Grzegorz Jarzyna）は、スタニスワフ・レム作の小説『ソラリス』から着想を得た『ソラリス4（Solaris 4）』（ドラマツルグ：トマシュ・シピエヴァク［Tomasz Śpiewak / ポーランド］）を、オスカラス・コルシュノヴァス［Oskaras Koršunovas］の芸術監督就任と同時にリトアニア国立ドラマ劇場（Lietuvos nacionalinis dramos teatras / Lithuanian National Drama Theatre［LNDT］）内に新しくできたホールの柿落し作品として上演した。小説のおおまかなプロットを基に、最近の隔離生

ギンタラス・ヴァルナス演出『すばらしい新世界』（リトアニア国立青年劇場）
© Dmitrij Matvejev

活を物語に組み込みつつ、新たな解釈を加えた。『ソラリス』には、長らく別の惑星に住んでいた知人同士が再び心を通わせることの難しさや、異なる環境での生きづらさが描かれており、コロナ禍の隔離生活を終えた現在の我々の感情と通じるものがある。『ソラリス4』も『すばらしい新世界』も、視覚に訴えると同時に、人間の深層心理にも触れた。リトアニア演劇界屈指の俳優たちの演技も印象的だった。

その数か月後、同じ劇場で、ディストピアをテーマにした作品『スリーパーズ（Sleepers）』（マリュス・イヴァシュケヴィチウス［Marius Ivaškevičius］作、オスカラス・コルシュノヴァス演出）が初演を迎えた。この作品の舞台となる2109年のモスクワでは、我々が今抱えている気候変動、水不足、人口過密などの問題は、新テクノロジーによってすでに解決されている。地球の人口の半数が眠っている間に、もう半数が活動し、これが10年ごとに入れ替わるという設定だ。

才能溢れるクリエーターたちが手掛けたこの作品は、大半の観客に好評だったが、早くもホモフォビアや女性蔑視的な内容を指摘され、説教臭く、趣がないと批評家からは辛口の評価が下された。しかし本作は、まだロシアの影響が色濃く残るリトアニアならではのディストピアを見事に描いている。

ディストピアの要素を含むSF作品は、児童演劇にもみられた。クライペダ・ドラマ劇場（Klaipėdos dramos teatras / Klaipėda Drama Theatre）で、ポーランド出身のコンラ

マリュス・イヴァシュケヴィチウス演出『スリーパーズ』（リトアニア国立ドラマ劇場）© Dmitrij Matvejev

コンラド・ドヴォラコフスキ演出『ロボット物語』（クレイペダドラマ劇場）
© Domas Rimeika

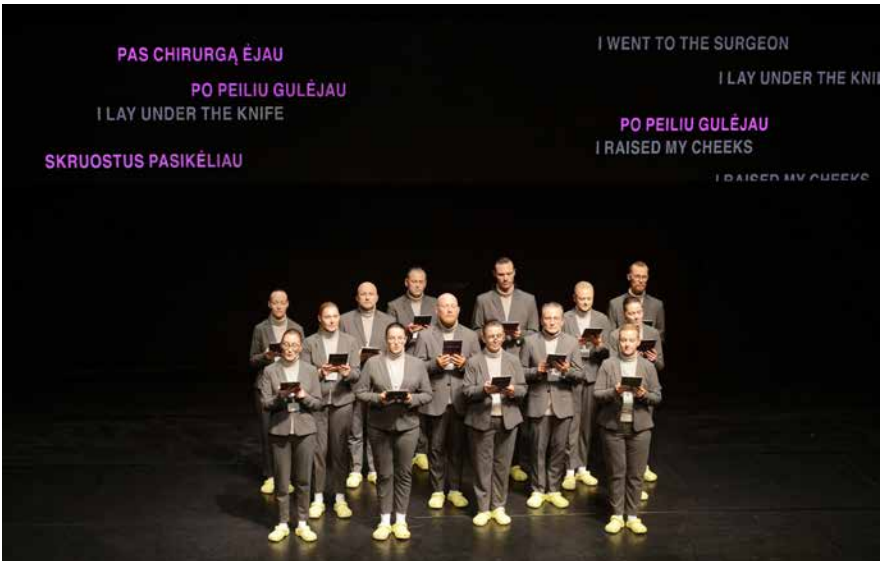
ド・ドヴォラコフスキ（Konrad Dworakowski）の演出で上演された『ロボット物語（Robotų pasakos）』はスタニスワフ・レムの同名小説をベースにしたものだが、この作品がその最たるものだった。リトアニアでは、こういった近未来を描いた児童演劇は珍しくない。その例として、『ビッグバン（Didysis sprogimas / The Big Bang）』（2020年、クライペダ・パペット・シアター［Klaipėdos lėlių teatras / Klaipėda Puppet Theatre］、演出：ツヴィ・サハール［Zvi Sahar /イスラエル］）、『ピノキオ（Pinocchio）』（2018年、ヴィリニュス・シアター「レレ」［Vilnius theatre “Lėlė” / Vilniaus teatras “Lėlė”］演出：シャルーナス・ダテニス［Šarūnas Datenis］）、「宇宙＋（Kosmosas+ / Cosmos+）」（2014年、リトアニア国立劇場、演出：クリステン・デルホルム［Kristen Dehlholm / デンマーク］）などがある。『ロボット物語』は、現在と未来を寓話的に描くことで、ある種の切なさが漂った。この種の切なさは、ディストピアの物語にはつきものだが、児童演劇で感じたことはいまだかつてない。

ディストピアの物語、または、最新テクノロジーと私たち人間との関係を描いたディストピア風の物語には『腸（bowel）』（演出：ノーベルタス・ヤシンスカス［Naubertas Jasinskas］製作：カウナス小劇場［Kauno miesto kamerinis teatras / Kaunas City Chamber Theatre］）、『ポータル（Portalas / Portal）』（演出：マンタス・ヤンチャウスカス［Mantas Jančiauskas］製作：オスカロ・コルシュノーヴォ劇場［Oskaro Koršunovo Teatras / Oskaro Koršunovo Teatre］）『惑星のエゴ（Planeta Ego / Planet EGO）』（演出：ニコラス・ダルンシュテット［Nikolas Darnstädt /ドイツ］製作：シャウレイドラマ劇場［Valstybinis Šiaulių dramos teatras / Šiauliai State Drama Theater］）の、『フランケンシュタイン・コンプレックス（Frankenšteino kompleksas / Frankenstein Complex）』（演出：ヴァルタース・シーリス［Valters Sīlis / ラトビア］）製作：カウナスドラマ劇場［Nacionalinis Kauno dramos teatras / The National Kaunas Drama Theatre］）を観ると、パンデミックが世界中の演劇に与えた多大なる影響、また、我々の生きる社会そのものの変わりようがうかがえる。これらの作品は、私たちが普段どのようにコミュニケーションをとりながら他者と共存しているか、私たちの価値観がどれだけ変わってしまったかを描いている。『スリーパーズ』は、失われた秩序を嘆いた作品だが、多くのSF作品は変化への祈りであるように思えた。

SF作品の他にも、現在の社会問題と向き合い、過去の出来事を振り返る作品が多

数生まれた。前に進むためには、向き合わざるを得ないテーマばかりである。障がい者を描いたカミレ・グドゥモナイテ（Kamilė Gudmonaitė）演出の『祝宴（Šventė / Feast）』（オスカル・クロシュノーヴォ劇場・ヴィリニュス市立劇場［Vilniaus miesto teatras / Vilnius City Theatre］共同製作）、暴力（性暴力を含む）を描いたローラ・クトゥカイテ（Laura Kutkaitė）演出の『人魚の沈黙（Sirenų tylos / The Silence of the Sirens）』（製作：リトアニア国立ドラマ劇場）、エルマールス・センコヴス（Elmārs Seņkovs）演出の『殴る人（Varovai / Beaters）』（製作：クレイペダ・ドラマ劇場）、ギルダス・アレクサ（Gildas Aleksa）演出の『タイタス（Titus）』（製作：Teatronas）、薬と癒しについて描いたアルトゥラス・ブムシュテイナス（Arturas Bumšteinas）演出の『大手製薬会社（ベンラファキシン）（Big Pharma［Venlafaxine］）』（製作：ユオザス・ミルティニス・ドラマ劇場［Juozo Miltinio dramos teatras / Juozas Miltinis Drama Theater］、ソ連が残していった社会システムと、それが男性の心に与えた影響、自己像について描いたエグレ・シュヴェドゥコウスカイテ（Eglė Švedkauskaitė）演出の『若い男の記憶（Jauno žmogaus memuarai / Memoirs of a Young Man）』（製作：リトアニア国立青年劇場）などの作品が発表された。今年の秋のシーズンは、名の知れた戯曲に新たな解釈を加えた若手による作品が上演されると同時に、ベテラン陣は、オリジナル作品に挑戦した。新たなディストピア作品も発表された。このジャンルは、まだ退く気配はない。上記のアルトゥラス・ブムシュテイナスは作曲家でもあり、アーティスト、ジギマンタス・クディルカ（Žygimantas Kudirka/台本・出演）と共に新作オペラ『すばらしい新身体（Puikus naujas kūnas / Brave New Body）』を創作した（製

アルトゥラス・ブムシュテイナス作曲、ジギマンタス・クディルカ台本・出演『すばらしい新身体』（Operamanija）
© Martynas Aleksa



作:Operomanija)。この音楽劇は、我々の魂の乗り物としての完璧な身体の可能性を描き、リトアニアの伝統音楽であるポリフォニーを土台にした。ヴァルナスが演出した上記『すばらしい新世界』の続編としてもとらえることができる。ディストピアはまだ終わっていないことを仄めかしているようだ。リトアニア演劇に訪れるすばらしい新時代、さらなる挑戦を約束するかのようであった。

Steiblytė, Kristina

これまで十年以上、リトアニア演劇の批評家として活動している。専門分野は演劇と人形劇。主に、演劇づくりと観劇の社会との関わりについて研究している。演出家や振付家のドラマツルグとしても活躍。2021年より、舞台芸術批評家協会(SMKA - Scenos meno kritikų asociacija / Association of Performing Arts Critics)の会長を務める。

(翻訳:石川麻衣)